

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：25405

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12828

研究課題名(和文) 名所図会に記された「名宝」の研究 統合目録の作成、現存作例の同定を主軸として

研究課題名(英文) A research on famous treasures described in Meisho-zue, by means of making up integrated list and identification of existing treasures

研究代表者

市川 彰 (ICHIKAWA, Akira)

尾道市立大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：80633106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、十八世紀後半の京都における「名宝」をめぐる文化環境を、数量と内容の両面からより具体的に解明することを目的とする。そのため、秋里籬島の編著『都名所図会』(1780)、『拾遺都名所図会』(1786)、『都林泉名勝図会』(1799)をテキストとして選択し、それらに記された「名宝」に関する情報を抽出して計2,880件の「名宝」の目録を作成した。また、現存作例と照合して同定を試み、1,481件を確実に、あるいは暫定的に同定可能なものと判断し、確実に滅失したものなどを含んで、現時点では同定不可能なものを1,399件とした。

研究成果の概要(英文)：This research aims at exploring more concretely the cultural environment in the late 18th century Kyoto, by means of studying the quantity and content of famous treasures. For this purpose, I chose as material three texts edited and written by Ritoh Akizato, Miyako-meisho-zue (1780), Shui-miyako-meisho-zue(1786), and Miyako-rinsen-meisho-zue(1799). From these texts, 2,880 treasures described were listed up. By checking with existing treasures, 1,481 treasures were identified certainly or provisionally, and 1,399 treasures, including undoubtedly perished treasures, could not be identified at present.

研究分野：日本美術史

キーワード：名所図会 京都 名宝 目録 同定 都名所図会 拾遺都名所図会 都林泉名勝図会

1. 研究開始当初の背景

十八世紀の京都において展開した多様な美術動向とは、制作者たちのごく身近に、数多くの「名宝」が存在していたという恵まれた環境と分かちがたい関係にあるであろう。天賦の才に恵まれ、なおかつ努力を惜しむことのなかった制作者たちは、師の教えを受け継ぎながらも、過去に生みだされ、京都という都市に集積されていた「名宝」を進んで学びとり、自らの制作の糧としていたのである。このような状況に関しては、従来、主として個別の作家研究や作品研究の立場から考察され、例えば請来された中国画などを対象とする絵画学習の問題について、多くの有益な知見が得られてきた。

しかしながら、そういった美術動向の基盤として捉えられるべき「名宝」をめぐる環境それ自体の具体的な様相については、多く概説的な説明がなされるにしても、いまだ十分に明らかにされていないようである。どのような「名宝」が、どれくらい京都という都市に存在しており、制作者たちの知るところとなっていたのか。この問題を明らかにすることによって、個々の作品、作家、美術動向の像はより明瞭に立ち上がってくるのではないだろうか。このような着想によって本研究は構想された。

2. 研究の目的

本研究の目的を端的に言うならば、十八世紀後半の京都に存在した「名宝」をめぐる環境の様相を、数量および内容という二つの側面からより具体的に明らかにすることである。この目的を達成するために、本研究においては、秋里籬島(生没年不詳)の編著になる京都をフィールドとする三件の名所図会をテキストとして設定する。なぜならば、各書には個々の「名宝」に関する諸情報が、広範かつ豊かに内包されているからである。

名所図会に関しては、美術史のみならず歴史、文学、都市、造園、観光など様々な領域からのアプローチがなされてきた。しかし、本研究のように各書が内包する「名宝」群に着目し、上述の問題意識に基づいた網羅的な研究は未だ見られないようである。本研究を遂行することによって、十八世紀後半の京都における「名宝」をめぐる環境がより具体的に明らかにされたとき、従来は概説的な説明にとどまっていた、多様な美術動向を生み出す文化環境に関して、数量および内容の両面においてより具体的な像を立ち上げることができよう。また寺社コレクションの変遷や、個別の「名宝」の受容の歴史、移動・流出した「名宝」の追跡的な調査などを含めて、日本美術史研究のさらなる深化に貢献することができるであろう。さらには、文化資源・観光資源の開拓や再発見、関連する展覧会の開催なども含めるならば、本研究の成果は、学問領域内にとどまらず、社会への還元との側面においても新たな契機とな

りうると期待される。

このように本研究の成果は、日本美術史の枠内にとどまらず、十八世紀の京都の文化環境を再検証する基盤的な研究として多くの領域において長く参照される基礎研究として位置づけられる可能性を大いに有し、より大きな観点からも、長い年月をかけて醸成された重層的かつ混淆する京都文化の解明の一助となるであろう。

3. 研究の方法

本研究は、秋里籬島の編著になる『都名所図会』(安永九年(1780)刊)、『拾遺都名所図会』(天明六年(1786)刊)、『都林泉名勝図絵』(寛政十一年(1799)刊)をテキストとして、大別して、統合された「名宝」目録を作成すること、そして現存作例と照らし合わせての同定作業によって構成される。

まず、テキストを精読し、「名宝」に関する諸情報を抜粋する基礎作業をおこない、さらに、より汎用性のある項目立て(作者・賛者、「名宝」名称、所蔵、抜粋、所載など)を用いて諸情報の分類・整理を試みた。各書における多様な記述のあり方に即し、項目立てや枠組みを時点修正しながら、各書別の「名宝」目録を作成し、最終的にはそれらを統合した「名宝」目録を作成する。

次いで、上記の「名宝」目録をベースとして、現存作例と照合することによって同定作業をおこなう。まず、先行研究の豊かな蓄積に広く当たり、その成果を取り込むことから開始する。同定作業にとくに有用と考えられる寺社の所蔵品目録や展覧会図録、指定文化財目録、関連する刊行物や論考に加え、インターネット上に公開されている研究機関や博物館美術館等の所蔵品データベースなども活用する。なお、この同定作業については、各書における記載順ではなく、より先行研究が蓄積され、一定の成果が予測される所蔵先を選択しながら進めていき、確実あるいは暫定的に同定可能と判断されるものを広く抑えていくこととする。この方針を堅持することによって、作業の進度を保っていき、併せて、各分野の専門家に適宜助言を請うことによって作業の精度を高めていく。さらに、一定の成果が見込まれる所蔵先を選択し、実地調査をおこなう。事前におこなった同定作業を報実見によって確認するとともに、実地でなければ得られにくい諸情報を鋭意求めていく。同定作業によって得られた成果は、逐次、「名宝」目録へと反映していくが、この際には、確実あるいは暫定的に同定可能なもの、現時点では同定不可能なもの、同定には至らないが形式・様式などが類推可能なものなどを弁別して目録に収載していく。

以上により、十八世紀後半の京都に存在した「名宝」をめぐる環境の様相を、数量及び内容という二つの側面から、より具体的に解明することを期する。

4. 研究成果

三ヶ年の研究期間における第一の成果としては、秋里籬島による三件の京都をフィールドとする名所図会に記された「名宝」を目録化し、統合をおこなって「名宝」目録を完成させたことを挙げておきたい。より具体的には『都名所図会』から1,051件、『拾遺都名所図会』から784件、そして『都林泉名勝図会』から1,045件の「名宝」に関する情報を抽出し、合計2,880件を数える目録を作成することができた。

ただし、例えば釈迦十大弟子や十六羅漢、五百羅漢などの、複数で構成される「名宝」に関してどのように目録化していくか、など今後の課題も残している。作業方針の選択によって、件数あるいは点数も異なってくるが、これに関しては、今後の課題とする。

続いての成果は、先行研究の豊かな蓄積に広くあたりながら、また特別公開の機会を捉えるなどして社寺などの所蔵先に赴いての現地調査を通して、個々の「名宝」を現存作例と照らし合わせて同定する作業を試みたことである。そして、その成果を先の統合目録に反映し、先に記した2,880件のうち、1,481件の「名宝」を< 確実あるいは暫定的に同定可能なもの > と判断した。

ここで少しばかり、分かりやすい例を挙げておくこととしたい。『都名所図会』巻之五の「平等院」の項には以下のような記述がある（〔 〕内は割注を示す）

本尊阿弥陀仏は、長六尺の坐像にして定朝の作なり。堂内の長押に廿五菩薩の像あり、同四壁并三方の唐戸に浄土九品の相を画、絵師の長者為成の筆。上には色紙形ありて観経の文を書す、中納言俊房の筆跡なり。天蓋瓔珞等は七宝を鏤、古代の作物にして美麗荘嚴他にならびなし。
〔 鳳凰堂は永承年中頼通公建立より曾て回祿の災なし、南方の奇観とす。〕

この記述からは、定朝作「阿弥陀如来坐像」、「廿五菩薩像」、宅間為成を絵師、藤原俊房を色紙形の筆者とする「浄土九品図庫画」、「天蓋・瓔珞」という四件の「名宝」に関する情報を抽出することができる。「廿五菩薩」との記述や、庫画の作者や筆者に関する伝承の記述などに若干の疑問が残るものの、現存作例との照合も比較的容易であり、それぞれが確実に同定可能と判断される「名宝」である。なお、四件ともに国宝に指定されている。

また、『拾遺都名所図会』巻之三の「長法寺」の項には以下のような記述がある（「…」記号は省略していることを示す）

〔 …当寺の什室に唐筆の涅槃像あり、其形絹地にして、豎七尺許、横四尺五六寸、図する所は釈迦如来涅槃に入給ふ後、再び金棺より出て光明を照し給ふを、菩薩羅漢四衆鳥獸等群拝する体相なり。これ

は釈迦仏御母夫人の為に出現し給ふなり。〕

この内容（図様）に関する簡要な記述が示している「名宝」とは、のちに寺外に出て、松永記念館の所有となり、さらにそこから寄贈されて現在は京都国立博物館に所蔵される「釈迦金棺出現図」（国宝）である。

このように、十八世紀後半において「名宝」として広く人々に知られていた「名宝」は、現代においても「名宝」として認識されているものも多く見られる。「名宝」が「名宝」として受容されてきた様相を、豊かな記述から喚起されるより具体的なイメージを伴わせながら再構築することが可能である例も多く見られたのである。

しかしながら、例えば仏像の尊名などの「名宝」名称が簡略に記されるのみで、他に情報が記述されない場合も多く見られた。また、衰退、廃仏毀釈ほかさまざまな理由で廃寺となった寺院に所蔵されていた「名宝」に関して、追跡調査をおこなうことができず、同定可能であるとの判断には至らないものも多くあった。< 確実に滅失したもの > や < 様式・形式などを類推することが可能なもの > を含んで、< 現時点では同定不可能なもの > を1,399件も残してしまっている。もちろんのこと、すべてを同定することは不可能であることは構想・計画の時点においても予測されるところであったが、実際に半数に近い件数を今後の調査研究に委ねてしまう結果となっている。

この結果を真摯に受けとめ、少しでも改善の方向へと進めていくためには、現地調査、実見調査などを含めて、研究期間終了後も継続的に同定作業をおこなっていくことが肝要である。と同時に、この結果によって今後の研究を構想し、計画を立案する際の大きな糧を得ることができたと考えている。

それは、秋里の名所図会に看取された情報、判断材料の不足とは、他の文献資料から得られる別の情報を付加することによって補うことができはしないだろうかという見通しである。現時点の構想としては、例えば黒川道祐の著した『揚州府志』（貞享三年（1686）刊）や、白慧（坂内直頼）による『山州名跡志』（正徳元年（1711）刊）、大島武好の『山城名勝志』（宝永二年（1706）刊）などの江戸時代に出版された地誌類などをテキストとして、本研究と同様の目録化の作業をおこない、先述の「名宝」目録に追加・統合していくことを計画している。また、さらには明治時代におこなわれた文化財調査に関する資料や、京都市参事会の編になる『平安通史』（明治二八年（1895）刊）に関する研究を遂行することによって、多種多様な情報源から情報を集積していくことができれば、同定可能と判断されるものもより多くなり、先に記した本研究の目的は、より達成されるのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(4) 研究協力者

()

〔雑誌論文〕(計3件)

市川彰、名所図会に記された京都の「名宝」
(三) - 『都名所図会』巻之四～巻之六-、尾道市立大学芸術文化学部紀要、査読無、第15号、2016、41-70

市川彰、名所図会に記された京都の「名宝」
(四) - 『拾遺都名所図会』巻之一-、尾道市立大学芸術文化学部紀要、査読無、第16号、2017、49-67

市川彰、名所図会に記された京都の「名宝」
(五) - 『拾遺都名所図会』巻之二-、尾道市立大学芸術文化学部紀要、査読無、第17号、2018、49-67

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市川彰 (ICHIKAWA, Akira)
尾道市立大学芸術文化学部・准教授
研究者番号：80633106

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：